SUAC

令和8年度 静岡文化芸術大学

教員特別研究／イベント・シンポジウム 成果報告書
研究紀要 第26巻 要旨集

刊行にあたって



奥中　康人
文化・芸術研究センター長

本報告書は、本学で取り組まれているさまざまな研究活動を紹介するものです。研究分野や対象、方法はそれぞれ異なりますが、どの研究者も自らの「問い」に向きあい、深い思索を重ねてきました。大学における研究は、ただ新たな知見を生み出すだけでなく、その成果を広く地域社会に還元するとともに、社会と共有していく役割も担っています。この報告書が、こうした取り組みを知っていただく機会となるとともに、新たな研究や交流につながることを願っています。

Contents

＜教員特別研究＞

ユーラシア文明の交錯と歴史文化資源を活用した地域の観光開発 P. 6
ー福建省・広東省に於ける「海のシルクロード」を事例に
国際文化学科　青木 健 教授

本学における実践力育成をめざした教育のあり方についての研究 P. 8
文化政策学科　田中 啓 教授

公立大学間の研究・教育・大学運営に関する協定の可能性に関する研究 P. 10
～沖縄県立芸術大学を事例にして
芸術文化学科　梅田 英春 教授

映像生成ＡＩの可能性及び限界 P. 12
デザイン学科　ブルベス・ジェローム 教授

大学ウェブサイトにも掲載しています。
＜教員特別報告＞
https://www.suac.ac.jp/researchcenter/acrc/specialresearch/

＜イベント・シンポジウム＞

SUACオープンサマーギャラリー2025 P. 14
デザイン学科　中野 民雄 教授

スティーブ・ジョブズのMacintosh展 P. 16
デザイン学科　羽田 隆志 教授

サイエンス・テクノロジーとデザイン P. 18
（時と場所を考えなさい）
デザイン学科　的場 ひろし 教授

世界のえほん展ー希望の扉をひらくー P. 20
文化政策学科　林 左和子 教授

北遠の神事芸能と面・刀剣の展示と講演会 P. 22
芸術文化学科　田中 裕二 准教授

ユネスコ無形文化遺産 P. 24
南音と古琴が紡ぐ中国古典音楽のコンサート＆ワークショップ
国際文化学科　兪 嶸 教授

2025年度 大学・大学生・若者による浜松市の中山間地域再生の可能性を考える P. 26
シンポジウム「2026まちむら交流フォーラム」
文化政策学科　舩戸 修一 教授

大学ウェブサイトにも掲載しています。
＜イベント・シンポジウム＞
https://www.suac.ac.jp/researchcenter/rcc/region/event/

＜静岡文化芸術大学研究紀要第26巻　要旨集＞

○研究論文

中国広東省におけるハラール料理の拡大とハラール認証 P. 28
ー西北の事例と華南の事例と静岡県の事例との比較ー
国際文化学科　俞 嶸 教授
青木 健 教授

日本語母語話者による英語過去形の習得 P. 29
国際文化学科　横田 秀樹 教授
言語習得研究機構　白畑 知彦
静岡大学　大瀧 綾乃
大学院　相川 美和

メディアにおける捕鯨――戦後日本のテレビ、映画、インターネット表象に関する調査 P. 30
文化政策学科　加藤 裕治 教授
文化政策学科　舩戸 修一 教授

鼓譜「早足」諸本の比較研究―「維新マーチ」の形成と展開― P. 31
芸術文化学科　奥中 康人 教授

アルブレヒト・アルトドルファー〈聖セバスティアヌス祭壇画〉《キリスト復活》に関する一考察 P. 32
芸術文化学科　藪田 淳子 講師

遠鉄グループにおける従業員満足の生成メカニズム P. 33
――統合経営と現場内発性のクロスレベル結合――
デザイン学科　中川 晃 准教授

教育効果三層モデルに基づく学生成長の示唆的因果推定 P. 34
――地域連携PBL「遠州鉄道リノベーションプロジェクト」における混合研究――
デザイン学科　中川 晃 准教授
デザイン学科　中野 民雄 教授

少女と老婆の交流の表象：映画『メタモルフォーゼの縁側』と『ポプラの秋』のアダプテーション比較からみる日本映画の特質 P. 35
デザイン学科　百束 朋浩 准教授

○研究報告

日本の大学における効果的な英語カリキュラムの開発 P. 36
国際文化学科　サリッチ・エドワード・ピアース 教授

アメリカ文学に見る普遍性と文化理解 P. 37
日本の大学生の視点による文化的比較：アメリカ文学のテーマと自文化の関係性
国際文化学科　ライアン・ジャック 教授

国際文化学科のIR：国際文化学科学生における教職課程・日本語教員養成課程の履修・修了状況と進路・累計GPAの関係（報告） P. 38
国際文化学科　高木 邦子 教授
国際文化学科　永井 敦子 教授
事務局　教務・学生室　佐々木 哲也 副主幹

16世紀ルーアンの治安行政と文書 P. 39
国際文化学科　永井 敦子 教授

「公共デザイン戦略」授業の実践と課題 P. 40
―福祉制度を用いたPBL演習を通して―
文化政策学科　小林 淑恵 准教授

静岡文化芸術大学両学部・両研究科が連携できる研究・教育環境の研究 P. 41
デザイン学科　磯村 克郎 教授
国際文化学科　西田 かほる 教授
芸術文化学科　永井 聡子 教授
デザイン学科　百束 朋浩 准教授
デザイン学科　中野 民雄 教授

2025年本学の「マイフェイバリットショップ」から学ぶZ世代の志向について（5） P. 42
ー変わりゆく日本の美意識の探求へー
デザイン学科　植田 道則 教授

地域高齢者の国際交流への意識と遠隔ツールの可能性に関する調査報告 P. 43
―南伊豆町および湖西市における調査よりー
デザイン学科　高山 靖子 教授
デザイン学科　迫 秀樹 教授
デザイン学科　松江 幸子 准教授
国際文化学科　サリッチ・エドワード・ピアース 教授

三遠南信の文化財建造物の特徴 P. 44
デザイン学科　新妻 淳子 准教授

半屋外公共空間における 仮設物のデザインに関する研究 P. 45
― 浜松市中心市街地を対象として― その1
デザイン学科　丹羽 哲矢 准教授
デザイン学科　亀井 暁子 教授

研究紀要の全文は「静岡文化芸術大学学術リポジトリ」で閲覧できます。
https://suac.repo.nii.ac.jp/

教員特別研究、イベント・シンポジウム研究、研究紀要第26巻要旨集の各執筆者等の情報は令和７年度時点の内容となります。

001



教員特別研究(先進的研究)成果報告書　配分研究費:2,220千円

ユーラシア文明の交錯と歴史文化資源を活用した地域の観光開発―福建省・広東省に於ける「海のシルクロード」を事例に

目的・概要

我々の作業仮説は、下記の中華イスラーム文化融合の3段階理論である。
第1段階 7～10世紀 陝西省・甘粛省
・羊の串焼き料理
・西安回民街
・中国でのエキゾチック・ツーリズムの対象。　政府の介入＝大
第2段階 19～20世紀 広東省・福建省
・イエメン料理、レバノン料理
・広州回民街
・民間の貿易の社交場。　政府の介入＝小
第3段階 21世紀 浙江省義烏
・義烏アラブ人街
・浙江省義烏の産業ツーリズムとは？
この中で、第1段階と第2段階については、2020年度～2024年度の調査で充分な知見を得た。2025年度は、この第3段階の「特徴」に関して調査した。

期間

令和6年4月1日～令和8年3月31日

研究担当者

文化政策学部 国際文化学科 教授 青木 健(研究代表者)
文化政策学部 国際文化学科 教授 兪　嶸

スケジュール

令和7年1月　地域連携実践演習
令和7年3月　厦門、泉州、莆田、深圳、広州調査
令和8年1月　地域連携実践演習
令和8年2月　広州、杭州、慈渓、義烏調査

研究成果

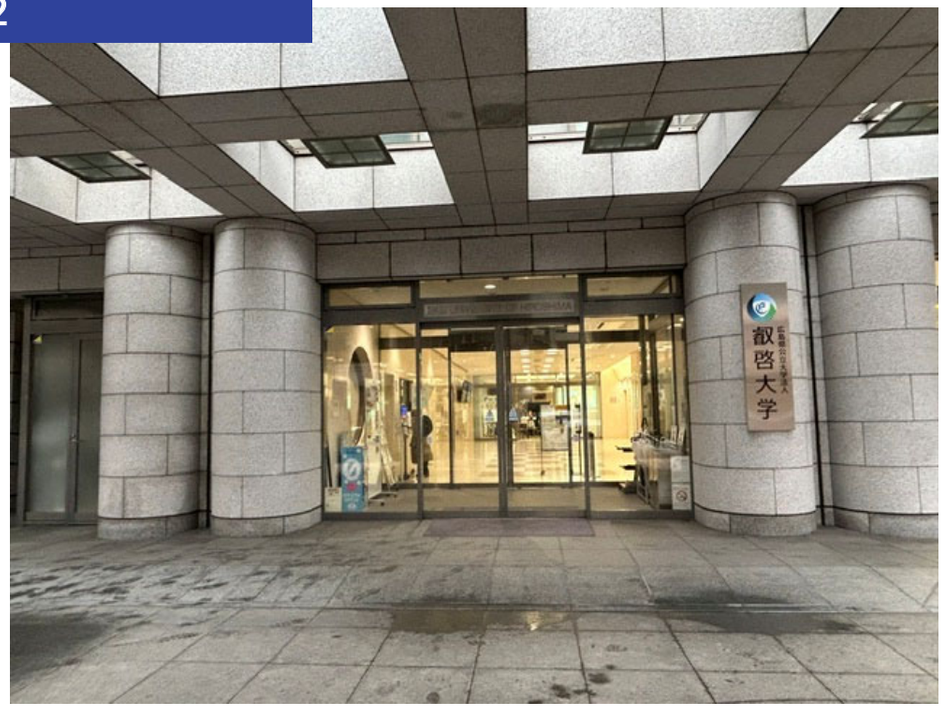
義烏では、中国人商人と中東アラブ人バイヤーの間で、甘粛省や寧夏回族自治区のアラビア語に堪能な中国人ムスリムがブローカーとして活躍していた。漢人社会で活躍の機会に恵まれなかった回族ムスリムが義烏に流入しているとすれば、現地での中国イスラーム文化は、「第1段階での西域イスラーム文化」と現代中東アラブ文化の混合形態と予想される。
すでに西域イスラーム文化は、甘粛省でエキゾチック・ツーリズムの消費対象として確立しているが、義烏の産業ツーリズムとは、バイヤーである中東アラブ人ムスリムの文化をどの程度取り込んだものなのだろうか。義烏の企業名には、イスラーム名(と漢字から判断される名称)が多いので、地域に一定程度根付いたイスラーム文化があって、それを取り込んだ浙江省版エキゾチック・ツーリズムではないかと予想される。
また、これに伴って、浙江省料理と中東アラブ圏のハラール料理が融合して、独自の浙江省ハラール料理が存在している可能性が高い。但し、予想に反して、大都市である杭州の中華ハラール料理よりも、義烏のハラール料理の方が発展している印象があった。
更に、バックアッププランとして、「静岡～浙江省・福建省～イランのギーラーン州を繋ぐ「茶の道」の実態解明」に向けた浙江省でのお茶産業の取材もおこなった。
これらの成果のうち、中華ハラール研究については、将来の科研費応募に繋げていく計画である。また、杭州のお茶文化等については、静岡県との共通性が高いと認識したので、教員特別研究費「杭州の総合的研究」を立案できないかと計画している。



今後の研究成果の還元方法

・『静岡文化芸術大学研究紀要』への投稿
・中国経済研究学術誌への投稿
・継続研究での科研費への応募
・「イラン～中国を繋ぐお茶の道」での研究助成への応募

002



教員特別研究（その他研究）成果報告書　配分研究費：1,052千円

本学における実践力育成をめざした教育のあり方についての研究

目的・概要

大学に対して実践力を備えた人材の育成に対する要請が高まっていることを踏まえ、課題解決型教育やデータ活用型教育をはじめとして、実践力の育成をめざした他大学の動向を把握した上で、本学の特性に合った実践力育成教育のあり方や文化政策学科のリサーチ＆プランニング系科目のバージョンアップの方向性を構想する。本研究の実施にあたり、国内の大学や高校を訪問調査するほか、文化政策学科の卒業生を対象とした調査を行う。

期間

令和6年4月1日～令和8年3月31日

研究担当者

文化政策学部 文化政策学科 教授 田中 啓（研究代表者）
文化政策学部 文化政策学科 教授 小杉　大輔
文化政策学部 文化政策学科 准教授 小林　淑恵
文化政策学部 文化政策学科 准教授 野島　那津子
文化政策学部 文化政策学科 特任教授 森山　一郎

スケジュール

令和6年4月～9月	基礎調査、科目検証方法の検討
令和6年12月28日～令和7年1月20日	卒業生に対するアンケート調査
令和6年10月～令和7年12月	リサーチ＆プランニング系科目の検証
令和7年8月～令和8年2月	大学（4校）、高校（3校）、静岡県総合教育センターに対するインタビュー調査
令和8年1月～3月	調査結果分析、結果とりまとめ

研究成果

【Ⅰ.実践力の育成をめざした教育の動向】
・大学に育成が求められている人材像や教育のあり方を把握した。
・国内大学における実践力育成教育の動向を把握し、4大学に対するインタビュー調査を実施し、実践力育成教育の具体的な取り組み方について示唆を得た。
・近隣の高校等を訪問して、情報教育や探求学習の現状を調査するとともに、高校側の大学の教育に対する期待を把握した。

【Ⅱ.リサーチ＆プランニング系科目の検証とバージョンアップ】
・リサーチ＆プランニング系3科目について科目運営状況と成果を詳細に把握した。
・さらに卒業生に対してアンケート／インタビュー調査を実施して、リサーチ＆プランニング系科目が卒業後に役に立った点や職場で求められているスキルや能力について把握した。
・検証結果や調査結果を踏まえてリサーチ＆プランニング系科目のバージョンアップの具体的な方向性を導いた。
・リサーチ＆プランニング系科目を高校生向けに紹介するための小冊子を編集・印刷した。

【Ⅲ.本学における実践力育成教育の現状と今後の方向性】
・本学全体として実践力育成教育に対してどのように取り組んでいくべきかについて検討し、基本的な方向性を導いた。





今後の研究成果の還元方法

一義的には、本研究の成果をリサーチ＆プランニング系科目の改善やバージョンアップに直接的に反映させていく。すぐに実行可能なものは直ちに科目の運営や指導に取り入れていき、科目間の調整やシラバスの修正が必要なことについては、次年度から科目に反映させていく。また次のカリキュラム改正時に反映させるものについては、学科内で共有して、カリキュラム改正に向けて準備をしていく。
一方、全学的な教育のあり方に反映できる内容については、学内で共有できる形で文書化して提供していく。
さらに、本研究の成果を用いて文化政策学科を高校等に対してわかりやすく広報していく方策も検討する。

003



教員特別研究(その他研究)成果報告書　配分研究費:883千円

公立大学間の研究・教育・大学運営に関する協定の可能性に関する研究～沖縄県立芸術大学を事例にして

目的・概要

本研究は、これまで本学において積極的に推進されてこなかった公立大学との研究・教育・大学運営の三つの側面に関する具体的な連携協定のあり方を研究テーマとし、すでに公立大学として積極的に連携協定に取り組む名桜大学の事例を調査し、その結果を踏まえて、地域文化・芸術と深く結びついた教育を行う公立大学法人沖縄県立芸術大学との研究・教育の両面の可能性や問題点を見出し、協定実現に向けての方法を模索した。

期間

令和7年4月1日～令和8年3月31日

研究担当者

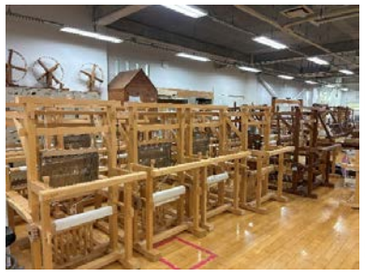
文化政策学部 芸術文化学科 教授　梅田　英春(研究代表者)
副学長　森　俊太
デザイン学部　デザイン学科　教授　藤井　尚子

スケジュール

令和7年5月～7月	名桜大学等、公立大学間の連携協定の調査
令和7年7月～令和8年2月	沖縄県立芸術大学長他、複数の教員との検討 大学(特に工房など)の施設見学など
令和8年1月	名桜大学の大学間連携担当の教員・職員との情報交換
令和8年3月	沖縄県立芸術大学側から教員間交流として招待を受け学生、教員と演奏を行う。 研究のまとめと総括、今後の協定のあり方を検討

研究成果

公立大学の事例として調査した沖縄県北部にある名桜大学は27の国内大学と協定を結び、うち公立大学とは3校と連携協定を結んでおり、年間10数人の国内留学制度を実施している。ただ公立大学全体を調査しても、公立大学間の連携協定は極めて少ないのが現状である。お互いに潤沢とはいえない予算の中、地域との連携に取り組む各大学は積極的に連携すべきと考える。
沖縄県立芸術大学は本学と異なり実技系芸術大学である。一方、沖縄という地域の特性を生かし、地域との連携に取り組む大学でもある。本研究では沖縄県立芸術大学の学長、副学長、音楽学部、美術工芸学部の両学部長、地域連携センターとしての機能をもつ沖縄文化研究所長と協定についての検討を重ねた。その結果、滞在型の単位互換を目的としての交流ではなく、相互に自身の大学で学べない分野の集中的な講義や実習を両大学で実施し、短期滞在で単位を取得するシステムの構築、教員間の共同研究などを目的とする連携協定を結ぶ可能性を研究成果として提案したい。具体的には、アートマネジメント分野での交流、工芸分野(染色・織・漆芸など)での交流、デザイン学部・学科間交流、芸術大学学生・教員による演奏会の開催、など具体的な交流が考えられる。





今後の研究成果の還元方法

沖縄県立芸術大学側は、学長も含め本学との連携協定を前向きに考えていることがわかっている。それゆえできるだけ早く、いくつかの目的を大学相互で確認し、連携協定を結ぶべきである。
そのための方法としては本学の学長と沖縄側の学長との意見交換、また大学として方針を定め、研究分担者の森(副学長、現理事)、藤井(デザイン学部長)、さらには教務部長などが加わり、ワーキンググループを作り、具体的な交流内容を定めていく必要がある。ただし、はじめから単位互換などを目指すのではなく、可能な分野で学生間・教員間交流を行うなど、徐々に交流を深めていく方法をとり、今回の研究成果を実際の公立大学間の連携協定につなげていきたいと考えている。

004



完全にAIで製作された映像作品

教員特別研究(その他研究)成果報告書　配分研究費:495千円

映像生成AIの可能性及び限界

目的・概要

デザインを学ぶ学生達が生成AI(動画生成ツール)を用い短編映像を制作する2件の実験を行った。AIツールとどう向き合い進めていくのか、教育上どのような障害に直面するかを観察した。本研究は、その障害の多くが一時的なものではなく構造的なものであり、これらのモデルが学習時にも生成時にもテキストによる媒介を通じてのみ動作することに起因すると論じる。

期間

令和7年4月1日～令和8年3月31日

研究担当者

デザイン学部 デザイン学科 教授 ブルベス・ジェローム(研究代表者)

スケジュール

令和7年4月～9月	事前リサーチ等
令和7年10月	学生との実験①
令和7年11月～12月	授業内の実験②
令和8年2月	学生との実験①(続き)
令和8年1月～3月	まとめ

研究成果

二件の実験を通じ、生成AI動画ツールの教育上の障害の多くが、技術の未成熟という一時的要因ではなく構造的な根を持つことを明らかにした。
これらのモデルは学習時にも生成時にもテキストを介してのみ動作するため、映像制作における非言語的なもの ―暗黙知や身体的経験― を十分に扱えない。
これら経験上でしか得られない知は、まさに学生達が大学教育において習得していくべきものであると考えられる。
結果として学生達は自らの直観や経験を活かせず、モデルが返したものをそのまま受け入れる他なくなってしまう結果に至った。
本研究ではこれを「受容の閾値」と呼ぶ。これは不満や諦めによる承認であり、教育上の行き止まりを示す。
第一の実験はこの限界を直接的に露呈させたが、AIを撮影後の映像から映像への変換に限定した第二の実験では、学習過程が保たれる用途を示唆した。
最も深刻なリスクは、映像教育がAIツールの許容範囲に逆に適応してしまうことである。批判的メディア教育の重要性は一層高まるが、それは失われた実技教育を代替できるものでは決してない。



実写(上)とAI変換後(Mago.AI、下)の比較

今後の研究成果の還元方法

本研究の成果は、日本映像学会52回大会において発表した。また、本研究に基づく論文を執筆中であり、公表に向けて準備を進めている。
さらに、映像制作におけるAIのより具体的な側面を扱う後続研究へと展開しつつある。それは、低コストのモーションキャプチャーとAIによるモーションキャプチャー技術を組み合わせる試みであり、本研究で明らかになった限界の一部に直接応えようとするものである。

001



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：551千円

SUACオープンサマーギャラリー2025

目的・趣旨	卒業生・修了生の卒業・修了展（2月）や有志による個展は開催されてはいるが、大学全体のギャラリーやシンポジウムは開催されていない。「SUACオープンサマーギャラリー」を企画・開催して恒例行事としたい。
日時・場所	令和7年8月2日～8月10日 静岡文化芸術大学　西ギャラリー
体制	（実施代表者）デザイン学部　デザイン学科　教授　中野　民雄 デザイン学部　デザイン学科　准教授　中川　晃 デザイン学部　デザイン学科　准教授　百束　朋浩 デザイン学部　デザイン学科　准教授　小川　直茂 デザイン学部　デザイン学科　准教授　小田　伊織 文化政策学部 国際文化学科　准教授　武田　淳

内容

本学に在籍する学生は誰でも参加可能なイベントであり、作品、研究成果、プロジェクト紹介、個人製作物などを募集して、学内生だけでなく高校生や一般市民に公開展示（8月上旬）し、様々な意見や評価を受けるイベントである。
イブニングレクチャーと称し、社会で活躍する講師（デザイン学部OB：キボリノコンノ氏、文化政策学部OG：大窪愛氏）をお呼びして、浜松発のデザインムーブメントの発信、大学のプレゼンスのアピール、市民と学生の交流をクリエイトする。

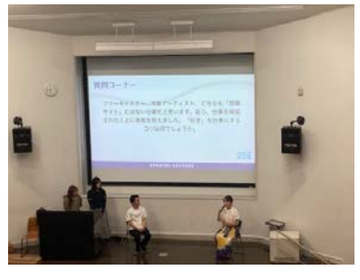


結果・成果

8月2日（土）～8月10日（日）までの計9日間、本学にてギャラリーの展示を開催した。
また、開催期間中の8月6日（水）にはイブニングレクチャーを催し、さらに8月9日（土）～10日（日）の2日間は本学のオープンキャンパスと同時開催したことで、本学の学生や教職員をはじめ一般市民の方々だけでなく、本学を志す多くの受験生（高校生）や保護者の方々にも鑑賞いただけた。
調整は非常に難航したが、オープンキャンパスと同時開催したことで集客が飛躍的に増加し、9日間トータルで約1,100人の集客があった。また、家康くんと直虎ちゃんとの記念撮影会は、遠方からお越しになられた方々に浜松の想い出を提供できた。
イブニングレクチャーの集客には課題が残ったものの、イベント全体としては大盛況となり、大学のプレゼンスの向上に多大なる貢献を果たした。
展示、装飾、ポスター作製、企画マネジメント等、この企画に参加した学生は学びの成果と知識・技術の向上が図られた。受験生からは「絶対に大学に受かって、この素敵な企画に参加します！」という嬉しいメッセージも寄せられ、入試広報にも一役買ったのではないかと考える。







002



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：205千円

スティーブ・ジョブズのMacintosh展

目的・趣旨	Jobs没後14年を経て、彼のビジョンが見えにくくなった。 命日10月5日を迎えるに当たり、彼が開発した当時のMacの実機を25台程度展示し、デザインと開発の背景とを照らし合わせ、Jobsが描いた未来を考察する。
日時・場所	令和7年10月18日～10月28日 静岡文化芸術大学　西ギャラリー
体制	（実施代表者）デザイン学部　デザイン学科　教授　羽田　隆志
共催・後援等	（後援）浜松市

内容

スティーブ・ジョブズのApple社に関係した活動を4期に分けその年代ごとの実機を展示した。書籍やインタビュー記事からジョブズが抱いていたビジョンを取り出しパネル展示した。
4つの期における転換と、逆に一貫して「芸術表現の道具を作る」という理想を追い続けていたと知ることにより商品企画とスタイリングを学ぶことがこのイベントの目的である。
またジョブズが芸術・彫刻などにも強い興味を持っていたことを表すためサモトラケのNIKE像（レプリカ）を展示した。単なる電気製品の展示ではなく芸術的な意味の展示であることを来客も感じ取ってくれた。



結果・成果

ジョブズはパソコンに興味があり、パソコンを生産することによって大きな利益を得ることを目的としていたと思い込んでいる人が少なくない。これはマスコミが誤った報道を繰り返していたためであるが、その根源には商品企画とは「商品そのもの」の生産作業だとの誤解がある。
この展示ではジョブズが商品そのもの、特にデザイン（スタイリング）に拘っていたもののそれは表面的な要素ではなく、ユーザーに与える印象を重視してその表現としてのスタイリングに拘ったのだということを理解すると同時に、根底にある判断根拠となった「ユーザーに与える印象」をどのようにジョブズが掴んだのか、インタビューでも語らなかったことを垣間見ることができたと思われる。来客からもジョブズは今までの印象とまったく違っていたという声が多数寄せられた。
また学外者が非常に多かったため、本学はデザインを、表面的なお絵描き・物作りとは異なった見方で見ていることを訴求できたと思われる。








003



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：432千円

サイエンス・テクノロジーとデザイン（時と場所を考えなさい）

目的・趣旨	「科学」と「技術」を、デザインの力でわかりやすく説明し、学生の科学や技術の分野への興味を引き出す目的で、展示とワークショップ等を組み合わせたイベントを、図書館内のスペースやギャラリー等を使い実施する。
日時・場所	令和7年10月2日～10月14日 静岡文化芸術大学　ギャラリー及び図書館
体制	（実施代表者）デザイン部　デザイン学科　教授　的場　ひろし デザイン部　デザイン学科　教授　かわ　こうせい デザイン部　デザイン学科　准教授　小川　直茂 デザイン部　デザイン学科　准教授　松江　幸子
内容	（1）10月2日から10月14日までギャラリーにて、時間を知る方法と位置を知る方法について、現代と1960年頃を比較した横長図表の展示、学生作品十数点の展示等を行い、図書館の展示スペースにて関連書籍の陳列を行った。10月15日以降は、横長図表と学生作品一点（クレイアニメを応用したデジタル時計）を図書館の展示スペースにて展示。 （2）10月7日に「地理空間情報活用の最前線」、10月10日に「正確な時はどのようにつくられるのか？」の特別講演を実施した。 （3）10月2日から10月14日まで本学の出会いの広場にてワークショップ「秋の花火」を開催した。



結果・成果	（1）ギャラリーの展示では、横5.4m×縦1.5mの大きさの横長図表（ターポリン）に、時間を知る方法と位置を知る方法について、現代と1960年頃を比較する形で情報の流れを示した。また、企画・構成を担当した4教員による時間や位置に関するトピックスの解説パネルの展示と、それぞれが指導した学生作品から「時」や「場所」に着目した作品十数点の展示を行った。また、図書館の展示スペースでは、約50冊の関連書籍の陳列を行った。見学者からは、それぞれについて興味深い内容として評価をいただいた。 （2）特別講演では、五味俊弘氏（ESRIジャパン株式会社 事業開発グループ部長）による「地理空間情報活用の最前線」と、花土ゆう子氏（前 国立研究開発法人情報通信研究機構 電磁波研究所電磁波標準研究センター長）による「正確な時はどのようにつくられるのか？」を実施し、一般市民、学生、教職員が聴講し、貴重な内容の講演だったとの意見が寄せられた。 （3）ワークショップでは、静岡大学情報学部木谷研究室から技術的な協力を得て、正確な位置情報を検出できる装置を活用した新しい形態のイベントを実施し、参加者から良好な反応を得ることができた。本成果は、測位航法学会主催のGPS/GNSSシンポジウム2025のポスター発表として12月3日に発表が行われた。

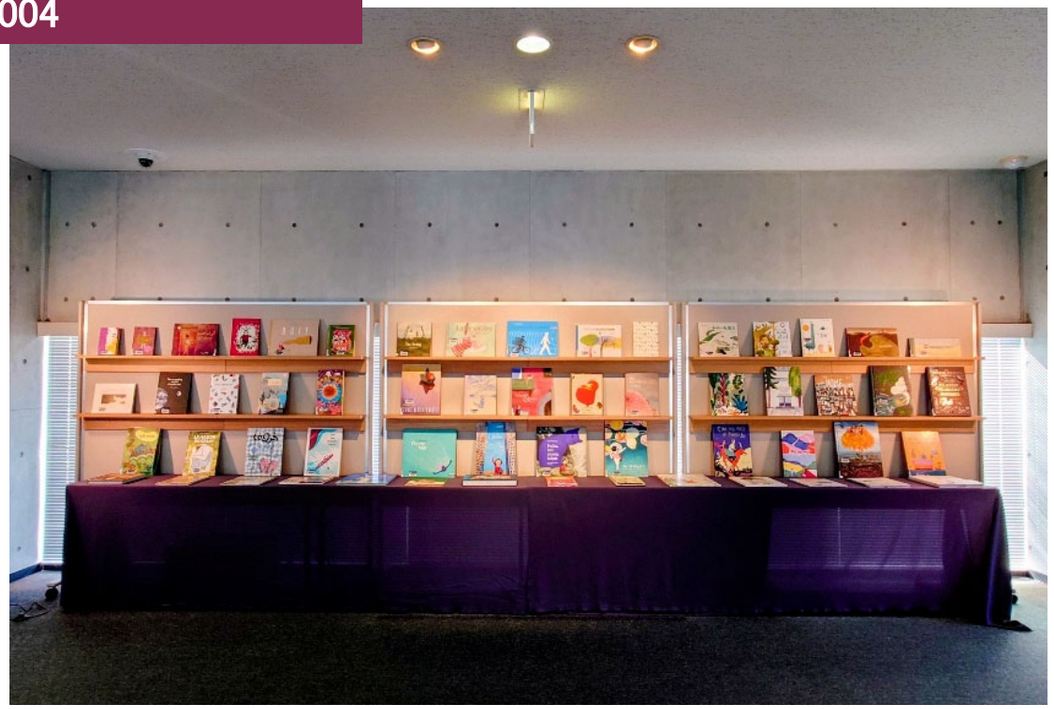








004



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：345千円

世界のえほん展－希望の扉をひらく－

目的・趣旨

本学は、国内で所蔵数が少ない外国語の絵本やグラフィックノベルなどを所蔵している。しかし、作品の存在は十分に知られていない。展示会開催により、学生や地域の方に所蔵する作品を知ってもらう機会とする。

日時・場所

令和7年12月8日～12月25日
静岡文化芸術大学　図書館・情報センター及びギャラリー

体制

（実施代表者）文化政策学部　文化政策学科　教授　林　左和子
デザイン学部　デザイン学科　　教授　かわ　こうせい
デザイン学部　デザイン学科　　教授　ブルベス・ジェローム
図書館・情報センター　井出　直樹
図書館・情報センター　土屋　麻子
図書館・情報センター　堀内　古季

共催・後援等

（後援）静岡県立中央図書館　浜松市　浜松市教育委員会

内容

職員と教員がそれぞれの専門知識を活かし、協力して企画・運営にあたった。開催期間は12月8日～25日（展示3は12月16日～23日）。
展示1「世界の美しい絵本たち」は、本学所蔵のコレクションから厳選した55カ国・97冊の美麗な絵本を、展示2「グラフィックノベルで考える国際情勢」は、国際紛争や平和を考えるグラフィックノベル17冊を厳選し、それぞれ解説をつけて展示した。
展示3「各国語の絵本をくらべてみよう」は世界各国の絵本とクリスマスを主題とした絵本131冊を展示、17日には学生によるお話会を実施した。
ポスターとチラシのデザインは、デザイン学科3年生（当時）嶝口唯果さん。



結果・成果

アンケートの配布数での集計およびアンケート未配布の学外者39人を加えると、本展の観覧者数は計285人である。なお、本展の図書館での展示は、本学学生や教職員のほか、当館の利用者カードで入館できる学外者も観覧できるが、展示は館内のオープンスペースで実施したため、観覧者のみを集計することはできない。そのため、実際の観覧者数はこれよりも多い（※ 開催期間中の図書館入館者数は、延べ5,413人である）。 アンケートの自由記述欄では、「ふだん目にすることがない世界の美しい絵本に触れることができて良かった」「グラフィックノベルに考えさせられた」「クリスマスが各国で結構違うのがおもしろかった」など好意的なコメントが多くみられた。絵本・グラフィックノベルを通して、世界の広い地域への関心をもってもらう機会になったと感じている。また本学の絵本・グラフィックノベルコレクションの存在を知ってもらうとともに、今後コレクションをどのように発展させていくかの方向性も見えてきたといえる。









005



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：750千円

北遠の神事芸能と面・刀剣の展示と講演会

目的・趣旨	北遠地域に伝来した祭祀芸能とそれに用いられた面、祭具を紹介・展示する。三遠南信の山里に伝えられてきた中世から続く民俗芸能の魅力を本学の学生たちや市中心部に住む市民の方々にもふれていただく。
日時・場所	令和7年11月14日～11月19日 静岡文化芸術大学　ギャラリー及び講堂
体制	（実施代表者）文化政策学部　芸術文化学科　准教授　田中　裕二 文化政策学部　国際文化学科　教授　　二本松　康宏
共催・後援等	（共催）浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会 （後援）浜松市　中日新聞社　静岡新聞社・静岡放送 （協力）懐山おくない保存会

内容

特別展示「懐山のおくない～舞が紡ぐ祈り～」（大学ギャラリーで2025年11月14日(金)から11月19日(水)まで）浜松市天竜区懐山・泰蔵院に伝来した神事芸能の面と刀剣祭具の展示。
懐山のおくない講演会及び実演披露（講堂にて令和7年11月15日(土)午後1時30分から午後4時30分まで）「無形民俗文化財と私」古水しおり、「日本刀と懐山のおくない」田中宏子、「懐山のおくないの魅力と中世芸能」宮嶋隆輔による講演会を実施。講演会の後、懐山おくない保存会による「実演披露」。



結果・成果

大学ギャラリーで開催された特別展示「懐山のおくない」及び講堂で実施した講演会・実演披露は、合計して346名の参加を得た。（内訳：講堂での講演会100名＋特展246名）。
特別展示は、企画立案から展示作業まで、地域連携演習を履修した学生8名によるもの。広報用のポスター・チラシ制作、展示室では展示目録を来館者に配布した。







006



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：227千円

ユネスコ無形文化遺産

南音と古琴が紡ぐ中国古典音楽のコンサート＆ワークショップ

目的・趣旨	海のシルクロードの玄関口、泉州で育まれた南音と、平安時代に日本にも伝来した古琴は、ともにユネスコ無形文化遺産に登録されている。本イベントは南音と古琴が紡ぐ中国古典音楽を広く地域に発信する。
日時・場所	令和7年11月15日 浜松市楽器博物館　天空ホール
体制	（実施代表者）文化政策学部　国際文化学科　教授　兪　嶸 文化政策学部　国際文化学科　教授　青木　健 文化政策学部　芸術文化学科　教授　奥中　康人
共催・後援等	（共催）浜松市　（公財）浜松市文化振興財団

内容	イベントは、コンサートとワークショップの二部構成で、浜松市楽器博物館の天空ホールにて開催。 第1部では、本学文化・芸術研究センター長の奥中康人先生がイベント開催の経緯と意義について説明した後、南音伝承者の蔡雅藝氏、古琴奏者の陳思来氏、そして南音研究を行いながら琵琶奏者としても活躍する長崎大学の王維先生を含む3名の出演者によるコンサートを行った。 第2部では、来場者の皆さんは古琴や南音で使用される楽器に実際に触れて演奏を体験し、奏者の方々との交流も楽しんでいた。



結果・成果	本イベントは、ユネスコ無形文化遺産に登録されている中国伝統音楽の魅力を地域の方に広く親しんでいただくとともに、楽器の街としての浜松の魅力を中国の音楽関係者に発信することを目的として開催した。結果として、予想を倍以上上回る130名の方にご参加いただいた。また、イベント終了後に奏者自らSNSで浜松の魅力を発信するなど、PR効果も得られたと考える。 第1部のコンサートでは、各楽器や曲目の解説を交えながら、南音と古琴を代表する七曲が演奏され、来場者には、配布された演奏曲紹介文を手に取りながら、熱心に鑑賞する様子がうかがえた。第2部のワークショップは、想定以上の参加希望者が集まり、関心の高さがうかがえたため、当初30分の予定を1時間に延長して実施した。参加者は実際に古琴や南音で使われる楽器に触れて、その感触や音色を楽しんでいた。古琴の歴史や特徴について奏者に積極的に質問するなど、参加者と奏者の間で活発な交流が行われた。総じて、イベントに参加した皆さんは、鑑賞と演奏体験を通じて、中国伝統音楽への理解を深めるとともに、ワークショップでは奏者との交流も楽しんだことと思われる。







007



イベント・シンポジウム等実績報告書　　配分事業費：389千円

2025年度 大学・大学生・若者による浜松市の中山間地域再生の可能性を考える
シンポジウム「2026まちむら交流フォーラム」

目的・趣旨	本学学生（舩戸ゼミや引佐耕作隊）や「山里いきいき応援隊」 など浜松の中山間地域で活動している若者が会し、地域再生の方策を議論すると共に本学の地域貢献を発信する。
日時・場所	令和8年2月2 2日 浜松市龍山森林文化会館
体制	（実施代表者）文化政策学部　文化政策学科　教授　舩戸　修一
共催・後援等	（共催）浜松市

内容

第一部では「開かれた中山間地域を目指して」と題し、法政大学現代福祉学部教授の図司直也氏による基調講演を行った。第二部では「住民組織から考える地域の今後」と題し、浜名区引佐町久留女木自治会長の松田好道氏と天竜区佐久間町下平自治会長の大石幸弘氏によるクロストークを実施した。自治会が抱える課題やその解決に向けた工夫について議論が交わされ、今後の地域づくりにおける自治会の役割と可能性が示された。第三部では「交流タイム」として市内の中山間地域で活動する団体がそれぞれの取り組みを発表した。市内の中山間地域を対象に調査研究を行う舩戸ゼミ（文化政策学科）や米作りに取り組む「引佐耕作隊」の本学学生も活動成果を報告した。



結果・成果

昨今、浜松市の中山間地域では集落における「空洞化」が多層的に進行している。人口減少や担い手不足による「人の空洞化」が進むことで荒廃農地の増加など「土地の空洞化」が生じ、さらにそれが共同体機能の低下を招く「ムラの空洞化」へと連鎖する。その背後では、地域に対する誇りや帰属意識が失われていく「誇りの空洞化」も進行している。このように中山間地域が抱える問題は、人口減少にとどまらず、地域の社会的・文化的基盤そのものの弱体化として捉える必要がある。そこで重要となるのは「住民自治の在り方」である。しかし、集落が置かれた状況は個別化・多様化しているため、それぞれの実態に即したサポートプログラムを構築し、既存の住民間のつながりを生かしながら、より実効性のある支援体制を整えることが求められる。さらに注目すべきは「困りごと」を地域資源として捉える発想への転換である。従来解決すべき課題とされてきた「地域の問題」を「外部との関係性」を生み出す契機として位置づけ、地域住民をエンパワーメントするだけでなく、地域に継続的に関わる「関係人口」を創出していくことが求められる。以上の論点を今後の浜松市における中山間地域づくりの指針とするとともに「2026まちむら交流フォーラム」の成果としたい。









001

中国広東省におけるハラール料理の拡大とハラール認証
－西北の事例と華南の事例と静岡県の事例との比較－

The Expansion of Ḥalal Food and Ḥalal Certification in Guangdong Province, China
-A Comparison of Cases in Northwestern China, Southern China, and Shizuoka Prefecture-

俞　嶸　YU Rong

文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

青木　健　AOKI Takeshi

文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

本論文は、中国広東省を中心に実施した実地調査を通じて、華南地域におけるハラール料理の拡大とその経済的背景を明らかにし、あわせてハラール認証の実態を検討したものである。調査の結果、次の2点が明らかとなった。①華南地域には、国内外からの移住イスラム教徒が経営するハラールレストランが集積しており、特に国外からの経営者の間ではチェーン展開の動きが認められること。②華南地域におけるハラール認証は、地方政府主導の西北地域とは異なり、民間の認証機関が主導で市場のニーズに応じた多様な認証が行われていること。

静岡県においても、近年、国外からのイスラム人口の流入が増加し、イスラム教徒の多様化も進んでいる。それに伴い、ハラール食品の制度化が進められる中で、中国華南地域が先行して実施しているような多様なハラール認証制度の導入が求められると考える。

Based on field research conducted in Guangdong Province, China, this paper has revealed the following two main points:①Ḥalal restaurants operated by Muslims who have moved into South China from both within and outside the country have become concentrated in this area, and among the latter, a trend toward chain expansion can be observed. ②Unlike in Northwest China, where the ḥalal certification system is government-led, in South China it is primarily driven by private certification bodies, which provide diverse forms of halal certification in response to market needs.

In regards to the current situation in Shizuoka Prefecture, the inflow of Muslims from abroad has increased in recent years, leading to greater diversification within the Muslim population. As the institutionalization of ḥalal food progresses, it is necessary to introduce diverse ḥalal certification systems similar to those that have been implemented in South China.

002

日本語母語話者による英語過去形の習得

The Acquisition of English Past Tense by Japanese-speaking Learners of English

横田　秀樹　YOKOTA Hideki

文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

白畑　知彦　SHIRAHATA Tomohiko

言語習得研究機構　静岡大学名誉教授
The Research Institute of Language Acquisition, Professor Emeritus at Shizuoka University

大瀧　綾乃　OTAKI Ayano

静岡大学　教育学部
Shizuoka University, Faculty of Education

相川　美和　AIKAWA Miwa

大学院　文化政策研究科
Graduate School of Cultural Policy and Management

本稿は、日本語母語話者による英語過去形*-ed*の習得を、Vendler（1967）の動詞4分類とInner Aspect（Travis 2010）の枠組みから再検討する。まず 学習者コーパスNICT JLE コーパスの55動詞について過去形の正用・誤用を動詞タイプ別に分析した結果、状態・動作動詞で誤用率が高く、達成・到達動詞で低いという傾向が確認され、過去形が[+telic]動詞に先行して付与されるとするAspect Hypothesis （Andersen & Shirai 1994）を支持し、Aspectual Features Account（Gavruseva 2004）の予測とは一致しなかった。また、義務的過去文脈での誤りの大半が原形でありながら、全体の過去形誤用率は先行研究より低いことも明らかになった。さらに、日本人大学生37名を対象とした容認性判断テストでは、過去文脈で一貫して過去形が選好される傾向がある一方で、完了相文脈でも特に達成・到達動詞で過去形の過剰容認が見られた。これらの産出・受容の結果を踏まえ、著者らは、日本語の「た」のアスペクト的性質とInner Aspectにおける[+bounded]/[+telic]素性を前提に、日本語母語話者が産出する*-ed*の一部がTによる過去時制ではなくイベント領域（EP/Inner Aspect）で産出されるpseudo-tense（擬似時制）として捉える仮説を提案し、JLEによる過去形習得の特性を説明する。

This paper re-examines the acquisition of the English past tense *-ed* by Japanese-speaking learners of English (JLEs) within Vendler's four-way verb classification and Travis's (2010) Inner Aspect framework. Using the NICT JLE Corpus, the authors analyze past-tense accuracy for 55 frequent verbs classified as states, activities, accomplishments, and achievements. Error rates are higher for stative and activity verbs and lower for accomplishments and achievements, a pattern consistent with the Aspect Hypothesis (Andersen & Shirai 1994) and incompatible with the Aspectual Features Account (Gavruseva 2004), which predicts early finiteness for both telic achievements and atelic states. Despite the dominance of bare-form errors in obligatory past contexts, overall past-tense error rates are relatively low. An acceptability judgement test with 37 university learners further shows that learners strongly favor past tense in past-time contexts but also over-accept past tense in resultative/perfect-like contexts, especially with telic accomplishments and achievements. On the basis of these findings, and of the aspectual and perspectival properties of Japanese *-ta*, the authors propose a pseudo-tense hypothesis: a subset of surface *-ed* forms in JLEs are not licensed by T[+past] but are realized inside the Event/Inner Aspect domain as the spell-out of [+bounded]/[+telic]. This analysis aims to reconcile low error rates on *-ed* form with pervasive bare-form errors in Japanese learners' past-tense acquisition.

003

メディアにおける捕鯨――戦後日本のテレビ、映画、インターネット表象に関する調査

Whaling in the Media—A Study of Representations in Postwar Japanese Television, Film, and the Internet

加藤　裕治　KATO Yuji

文化政策学部　文化政策学科
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

舩戸　修一　FUNATO Shuichi

文化政策学部　文化政策学科
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

2019年に日本は国際捕鯨委員会（IWC）を脱退し、それまでの調査捕鯨に代わり、商業捕鯨を再開することになった。このような捕鯨をめぐる変化の中で、本論は終戦後から現代に至るまでの捕鯨関連のメディア映像を可能な限り収集し、整理することを目的とする。こうしたメディア映像における表象の変遷を調査することで明らかになったのは、長らく捕鯨をめぐる問題の中心であった捕鯨推進と反捕鯨をめぐる政治的・文化的な対立が、商業捕鯨開始後、ほとんど論じられなくなっているという点である。それらに代わって捕鯨は、主に産業的な側面や、食や祭事に関する地域文化としてメディアに取り上げられている。こうした変化は捕鯨をめぐる状況の変化と一致するが、そうしたメディア表象の具体的な内容は多様なものになっていることが明らかになった。最後に本論のこうした試みが、捕鯨を「文化の対立」の観点からだけではなく、「広く捕鯨問題を捉える視点」に関わるものであることを論じる。

In 2019, Japan withdrew from the International Whaling Commission and resumed commercial whaling, replacing its previous research whaling. In these changes surrounding whaling, this paper attempts to collect as many TV programs, films and videos about whaling　as possible from the postwar period to the present day and organize media representations of whaling. By examining the evolution of representations in such media, it became clear that the political and cultural conflict between pro-whaling and anti-whaling—long at the heart of the whaling debate—has largely ceased to be discussed since the resumption of commercial whaling. Instead, whaling is now primarily covered in the media for its industrial aspects and as a regional cultural practice related to food and festivals. These changes align with shifts in the whaling situation, but it has become clear that the content of such media representations has become diverse. Finally, this paper argues that such an approach is not merely about　viewing whaling from the perspective of “cultural conflict”, but rather relates to a “broader perspective on the whaling issue”.

004

鼓譜「早足」諸本の比較研究 ―「維新マーチ」の形成と展開―

A Study on Manuscript Variants of the *Haya-ashi* Drum Notation: The Formation and Transformation of the "Ishin March"

奥中　康人　OKUNAKA Yasuto

文化政策学部　芸術文化学科
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本論文は、幕末から明治初期にかけて演奏されたと伝わる行進曲「維新マーチ」の実態を、当時の鼓笛隊が用いた小太鼓譜（鼓譜）に基づいて検証し、その伝播と変容の過程を明らかにすることを目的とする。

筆者は、既往研究において上山藩鼓笛楽保存会が継承する「早足」が、幕末期の「英国マルス」鼓譜と同じリズム構造を持つことを明らかにした。本稿はこの成果を踏まえて、「英国マルス」に類似する行進曲（本論文では「早足」と総称）が記載されている複数の鼓譜（写本七点・刊本四点）を分析した結果、これらが高い類似性を示しながらも、短期間のうちに展開・変容したことが判明した。さらにこの曲の原型が慶応元年まで遡ること、および刊本の作成については高槻肇と橋爪貫一の間に協力関係が存在したことを示唆した。

This study examines the musical structure of the marching tune known as the 'Ishin March,' which is believed to have been performed from the final years of the Edo period through the early Meiji era. Drawing upon snare drum scores (kofu) used by fife and drum corps of the time, the analysis aims to clarify the processes of transmission and transformation.

The author demonstrated that the marching tune '*Haya-ashi*,' preserved by the Kaminoyama Domain Fife and Drum Music Preservation Society, had an identical rhythmic structure with the drum score referred to as '*Eikoku* March' from the late Edo period (Okunaka, 2025). Building on this finding, this study compared and analyzed eleven drum scores—seven manuscripts and four printed editions—that include tunes similar to '*Eikoku* March,' collectively referred to in this study as '*Haya-ashi*.'

The results reveal that these eleven scores exhibit a high degree of rhythmic similarity, while also reflecting the rapid development and transformation of military music within a short time span. Furthermore, the study points out that the prototype of this tune dates back to 1865, and that a collaborative relationship existed between Hajime Takatsuki and Kan-ichi Hashizume in the production of the printed editions.

005

アルブレヒト・アルトドルファー〈聖セバスティアヌス祭壇画〉《キリスト復活》に関する一考察

Albrecht Altdorfers The Resurrection of Christ of Saint Sebastian Altar

藪田　淳子　YABUTA Junko

文化政策学部　芸術文化学科
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

16世紀のドイツの画家、アルブレヒト・アルトドルファーの〈聖セバスティアヌス祭壇画〉は、オーストリア、リンツのアウグスティノ会の聖フロリアヌス修道院から依頼を受けて制作した、画家の中期の代表作である。同祭壇画のうちキリスト受難伝の《キリスト復活》の場面には、復活主題には珍しい、鮮烈な朝陽の描写が見られる。本稿ではこの朝陽のモチーフの意味を明らかにするため、同時代の復活図とアルトドルファーの《復活》を比較し、さらにキリストがマンドルラの光で包まれるキリスト変容や昇天の主題との関連について検討する。続いてキリストのリンボ降下の典拠における太陽に関する記述に着目し、復活主題との結びつきについて考察する。最後に太陽としてのキリスト像との関連から、アルトドルファーの《復活》の意味内容について検討したい。

Sebastian Altar is a masterpiece created by the 16th century German painter Albrecht Altdorfer during the middle period of his career. It was painted following a request by St. Florian's Priory, an Augustinian monastery in Linz, Austria.

This altarpiece depicts the scene of the Resurrection from the Passion of the Christ and features a vivid image of the morning sun, which is rarely depicted in images of the Resurrection. To elucidate the meaning of the morning sun, I compare Altdorfer's "Resurrection" with his contemporaries' paintings of the same motif and examine its relevance to motifs of the Transfiguration and Ascension, in which Christ is enveloped in a mandorla. Then, focusing on the descriptions of the sun in authorities of the Descent of Christ to Limbo, I discuss their connection with the motif of the Resurrection. Finally, I probe the meaning and connotation of the "Resurrection" by Altdorfer from the viewpoint of Christ's image as the sun.

006

遠鉄グループにおける従業員満足の生成メカニズム ――統合経営と現場内発性のクロスレベル結合――

The Mechanism Generating Employee Satisfaction within the Entetsu Group:Cross-level integration of integrated management and field-level endogeneity

中川　晃　NAKAGAWA Akira

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

地域公共交通の持続には、財務効率だけでなく現場の内発性による信頼性維持に因る影響が大きい。本研究は遠鉄グループの職員を対象に、11名の質的調査、並びに、33名の量的調査を通じ、安全の内面化や等位的な情報共有、OJTによる暗黙知継承、誇りの循環を同定し、「地域」「くらし」を核とする情緒的価値と社会関係資本が制度や文化、ガバナンスと再結合して「地域共創→信頼→基盤強化」を駆動する構造を示した。また、理論的含意と運用指針を示し、従業員満足の生成過程も実証した。

The sustainability of regional public transportation depends not only on financial efficiency but also significantly on maintaining reliability through internal motivation at the operational level. This study, conducted with employees of the Enshu Railway Group through qualitative interviews with 11 individuals and quantitative surveys of 33 employees, identified the internalization of safety, equitable information sharing, tacit knowledge inheritance through OJT, and the cycle of pride. It demonstrates a structure where emotional values centered on "community" and "daily life," along with social capital, reconnect with systems, culture, and governance to drive "community co-creation → trust → foundation strengthening." Furthermore, it presents theoretical implications and operational guidelines, while also empirically demonstrating the process of generating employee satisfaction.

007

教育効果三層モデルに基づく学生成長の示唆的因果推定 ——地域連携PBL「遠州鉄道リノベーションプロジェクト」における混合研究——

Suggestive Causal Inference of Student Growth Based on the Three-Layer Model of Educational Effects : A Mixed-Methods Study in the Regional Collaboration PBL “Enshu Railway Renovation Project”

中川　晃　NAKAGAWA Akira

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

中野　民雄　NAKANO Tamio

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

本研究はPBL型授業を対象に、量的・質的研究を統合し、学生の理念に始まり、その学習プロセス、そして、学習成果で構成される三層からなる教育効果構造モデルを検証した混合研究である。量的所見を踏まえた質的分析から、学生の関与度の違いで停滞の「型」が異なることが判明した。低関与の学生は、可視化は進むが比較基準がなく中盤で具体化が止まりやすい。他方、高関与の学生は、一次情報で序盤は進む一方で終盤に合意主義とルール未整備で決め切れない傾向が確認された。

This mixed-methods study examined a three-tiered educational effectiveness structure model for PBL-based instruction. Integrating quantitative and qualitative data, the model comprises three layers: student ideals, the learning process, and learning outcomes. Qualitative analysis informed by quantitative findings revealed that the “patterns” of stagnation differ based on student engagement levels. Low-engagement students progressed in visualization but tended to halt concretization midway due to a lack of comparison criteria. Conversely, high-engagement students advanced early using primary information but showed a tendency to become indecisive late in the process due to consensus-driven approaches and insufficiently established rules.

008

少女と老婆の交流の表象：映画『メタモルフォーゼの縁側』と『ポプラの秋』のアダプテーション比較からみる日本映画の特質

Representation of the interaction between a young girl and an old woman : Compare Film Adaptation of "Metamorufôze no engawa" and "Popura no aki"

百束　朋浩　HYAKUSOKU Tomohiro

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

本稿は、年の差のある女性同士の交流を描いた2作のアダプテーション映画『ポプラの秋』と『メタモルフォーゼの縁側』を対象に原作メディアの差異がいかに映像表現と物語の意味を変容させるかを比較分析するものである。両作品は「年の差の友情」という共通のモチーフを持ちながら、原作が「小説（言語）」か「漫画（視覚）」かというメディア的差異、および制作時期の社会的背景において対照的な特徴を持つ。

分析の結果、以下の二点が明らかになった。第一に、メディア変換の戦略において、小説原作の『ポプラの秋』は内面描写の欠落を補うために具体的な風景による情動の共有を図ったのに対し、漫画原作の『メタモルフォーゼの縁側』は視覚的記号の再現と生身の身体性との軋轢を露呈させた。第二に、女性および高齢者の表象において、前者は家父長制的な価値観を残した「垂直的な継承」を描いたのに対し、後者は属性を超えた「水平的な連帯」を描き出している。本稿では、日本のアダプテーション映画においては、リンダ・ハッチオンらが指摘するような解釈の自由度よりも、原作メディア固有の受容体験を映像において「感覚的に再現」することに重きが置かれている点が日本映画のアダプテーションの独自性であると指摘した。

This paper comparatively analyzes two adaptation films,”Popura no Aki” and "Metamorufôze no engawa" which depict interactions between women with a significant age gap. It examines how differences in the source media transform visual expression and narrative meaning. While both works share the common motif of "intergenerational friendship," they possess contrasting characteristics regarding the difference in source media—whether a "novel (linguistic)" or "manga (visual)"—and the social backgrounds of their respective production periods.

The analysis revealed the following two points. First, regarding strategies of media transformation: Autumn at the Poplar House, based on a novel, attempted to share affect through specific landscapes to compensate for the lack of internal textual description. In contrast, BL Metamorphosis, based on a manga, exposed the friction between the reproduction of visual signs and living corporeality.

009

日本の大学における効果的な英語カリキュラムの開発

Developing an Effective English Curriculum for a Japanese University

サリッチ・エドワード・ピアース　Edward Pearse SARICH

文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は、日本の大学における効果的な英語カリキュラムの開発を検討し、言語知識とコミュニケーション能力のバランスに焦点を当てるものである。多くの学生は、文法や語彙に関して一定の基礎を有して大学に入学する一方で、英語を実際の場面で使用する経験は限られている。こうした課題に対応するため、本研究では、体系的な言語インプットと、意味のある相互的な活動の機会を統合したカリキュラムを設計した。

本研究では、大学における外国語カリキュラム設計における主要な検討事項として、関係者の多様なニーズへの対応、必修英語科目の位置づけ、習熟度別クラス編成、授業内容の標準化、自律的学習の促進などを取り上げる。また、コミュニケーション能力の育成という目標と、大学における評価制度との整合性を図る上での課題についても考察する。本カリキュラムモデルは、言語教育における中核的な原則を実践的に応用したものであり、学修成果、キャリア形成、ならびに生涯にわたる英語使用を支援する、柔軟性を備えた体系的枠組みを提示する。本研究の知見は、日本の高等教育におけるカリキュラム改革や、EFL 環境におけるコミュニカティブ・アプローチの有効性に関する議論に寄与するものである。

This study examines the development of an effective English curriculum for a Japanese university, focusing on the balance between linguistic knowledge and communicative skills. Many students enter university with a solid foundation in grammar and vocabulary but have limited experience using English in real-world contexts. To address this, a curriculum was designed to integrate structured language input with meaningful opportunities for interaction. The study explores key considerations in foreign-language curriculum design at university, including addressing the diverse needs of stakeholders, the role of mandatory English study, ability grouping, standardization of course content, and the promotion of autonomous learning. It also examines the challenges of aligning institutional assessment practices with the goal of communicative competence. This model presents a practical application of core principles in language curriculum development, providing a structured yet adaptable framework that supports academic success, career readiness, and lifelong English use. The findings contribute to broader discussions on curriculum reform in Japanese higher education and the effectiveness of communicative approaches in EFL settings

010

アメリカ文学に見る普遍性と文化理解
日本の大学生の視点による文化的比較：アメリカ文学のテーマと自文化の関係性

Cultural Comparisons and Universal Themes: How Japanese University Students Relate Themes from American Literature to their Culture

ライアン・ジャック　Jack RYAN

文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

日本の大学における英語文学教育では、言語の壁や文化的距離、読書習慣の減少が課題となっている。本アクションリサーチは、日本の大学における英語言語でのアメリカ文学講座を受講する29名の学生が、異文化比較および普遍的テーマの観点から、その文学テキスト解釈にどのように取り組んだのかについて調査した研究である。アンケート、授業討論、各週の授業後の振り返り、読書感想文、最終プレゼンを通して、学生たちはアメリカ文学への理解を深めるとともに、それを日本の文化・歴史・文学と関連付けて考察していたことが明らかになった。学生たちは、友情、家族の葛藤、差別、アイデンティティといったテーマに強い関心を示した。特に、歴史的背景や異文化比較、普遍的な課題を重視しながら、個人的アイデンティティに関わるテーマに取り組むことで、アメリカ文学教育が学生にとって一層効果的であることが示唆された。

This action research study investigated how 29 students in an English-medium American literature course at a Japanese university engaged with literary texts in terms of cross-cultural comparisons and universal themes. A combination of surveys, class discussions, weekly post-lesson reflections, book reports and final presentations revealed that students not only deepened their understanding of American literature but also connected it to Japanese literature, culture and history. Students found personal relevance in themes including individualism, friendship, family relationships, identity and discrimination. The findings suggest that when students are taught historical context, encouraged to compare cultures, and reflect on themes they can personally relate to, they will engage deeply with American literature.

011

国際文化学科のIR：国際文化学科学生における教職課程・日本語教員養成課程の履修・修了状況と進路・累計GPAの関係（報告）

Institutional Research (IR) in the Department of Intercultural Studies: Enrollment, Completion, Career Paths, and GPA in Teacher Training and Japanese Language Education Programs

高木　邦子　TAKAGI Kuniko
文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

永井　敦子　NAGAI Atsuko
文化政策策部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

佐々木　哲也　SASAKI Tetsuya
事務局　教務・学生室
Educational and Student Affairs Section

本報告は、国際文化学科におけるIR第４報であり、2012～2021年度入学生を対象に、教職課程および日本語教員養成課程の履修・修了状況と卒業時の姿との関連を示したものである。対象期間において教職課程の履修届を提出した183名のうち、卒業時に教員免許を取得した者は97名（53.3%）であり、そのうち卒業後すぐに教員免許を活かした進路に進んだ者は41名（42.3%）であった。一方、日本語教員養成課程については、当初日本語教員に関心を示したと推測される401名のうち、履修届を提出したのは153名（38.2%）であった。最終的に課程を修了した91名は履修届提出者の59.7%、当初関心を持った者全体の22.7%に相当する。卒業後に日本語教員として専門性を活かした職に就いた者は7名（7.7%）と少数だが、制度改正により今後は専門職就職者の増加が期待される。なお、資格課程は履修負担が大きいと認識されがちだが、本報告の結果からは、免許取得や課程修了に至った者の累計GPAが中途離脱者や未了者よりも高い傾向が確認された。資格課程履修の困難さは本人の覚悟や資質に左右される側面が大きいといえる。

本報告では、教職課程および日本語教員養成課程を対象に、履修・修了状況、卒業後の進路、累計GPAを数量的に整理し、両課程間における資格取得および進路活用の実態とその違いを明らかにした。この知見が、今後の資格課程履修指導の改善と学生支援の充実に資することを期待する。

This report, the fourth installment of Institutional Research(IR)in the Department of Intercultural Studies, examines the relationship between enrollment and completion in two qualification programs—the Teacher Training Course and the Japanese Language Teacher Training Course—and students' status at graduation, based on data from those admitted between 2012 and 2021. Among 183 students who registered for the Teacher Training Course, 97(53.3%)obtained a teaching license by graduation, and 42.3% of them entered careers utilizing the qualification immediately after graduation. Of the 401 students initially presumed to have an interest in Japanese language teaching, 153(38.2%)submitted course registration, and 91(59.7%) completed the program. Only seven graduates(7.7%)pursued careers related to Japanese language teaching, though future increases are expected following institutional changes. While qualification programs are often perceived as demanding, the cumulative GPA of those who completed the programs was higher than that of students who withdrew or did not finish.

This report clarifies differences between the two qualification programs in terms of enrollment-to-completion rates, post-graduation career utilization of qualifications, and cumulative GPA.

012

16世紀ルーアンの治安行政と文書

Administration Literacy and Police in 16th Century Rouen

永井　敦子　NAGAI Atsuko
文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

本論文では16世紀ルーアンにおける治安行政の強化と文書化の関係を確認していく。治安行政とはペスト対策とゴミ処理に始まり、救貧・浮浪者対策、必需品の供給、市内の人々についての情報把握と安全確保など、当時「ポリス」の語でカバーされる領域である。高等法院と都市当局とが権限分担を調整する際に、治安行政は両者の関心を引きやすい領域であり、相互の交渉、前例の参照、実態把握にも文書を頼りながら、両者は対策を強化できた。文書化の進展を視野に入れることで、この段階をルネサンス王政と位置づけ、ここから絶対王政の形成過程を後づけることができるのではないか。

In this article the relationship between administration literacy and public security in 16th-century Rouen is focused on. In strengthening the 'police', documentation played a crucial role. The term 'police' covered public security administration of a city in that era. It included measures such as plague control, street cleaning, poverty relief, vagrancy inhibition, supply of necessities, and ensuring the safety of citizens as well as accumulating information of city dwellers. The newly established Parlement became dominant over the city council concerning about public security of the city. The both institutions enforced the 'police' based on increasing volume of written texts, while they referred documents for their mutual negotiations, consulting precedents and seeking reports on the actual situation. Questions on the extent of administration literacy may be valuable for following the change from Renaissance monarchy to absolute monarchy.

013

「公共デザイン戦略」授業の実践と課題
―福祉制度を用いたPBL演習を通して―

The Practice and Challenges of the “Public Design Strategy” Course: A Project-Based Learning Approach Utilizing Welfare Systems

小林　淑恵　KOBAYASHI Yoshie

文化政策学部　文化政策学科
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、令和3年から令和7年度の静岡文化芸術大学文化政策学部の学科専門科目「公共デザイン戦略」の実践を報告し、制度を媒介とした公共デザイン教育の可能性を考察するものである。授業では、「障害者総合支援法」に基づく「グループホーム（共同生活援助）」制度を題材に、学生が制度の構造と運用を理解し、独自の生活支援プランを構想するPBL型演習を行った。学生は、福祉制度改革等の背景を踏まえつつ、事業運営プランの検討や現場ヒアリング、外部審査を通じて、制度を「所与の仕組み」ではなく、「社会をデザインするために再設計可能な仕組み」として捉える視点を得た。成果として、文化・地域資源・生活創造を融合した多様なグループホーム案が生まれ、教育と社会を往還する学びのモデルが示された。

This paper reports on the practice of the course Public Design Strategy offered by the Faculty of Cultural Policy at Shizuoka University of Art and Culture, and examines the potential of public design education mediated through institutional frameworks. The course focused on the “Group Home (Community Living Assistance)” system based on the Comprehensive Support Law for Persons with Disabilities, in which students learned about the structure and operation of welfare systems and developed their own life-support plans through a PBL (Project-Based Learning) approach. Students, while considering the background of welfare system reforms, engaged in a multilayered learning process that included developing operational plans, conducting field interviews, and receiving feedback from external reviewers. Through these experiences, they came to view social systems not as fixed mechanisms but as reconfigurable frameworks for designing society. As a result, students produced diverse group home concepts integrating cultural and regional resources with creative approaches to daily life, thereby demonstrating a model of learning that connects education with society in a reciprocal manner.

014

静岡文化芸術大学両学部・両研究科が連携できる研究・教育環境の研究

Research into a research and educational environment that allows collaboration between the two faculties and graduate schools of Shizuoka University of Art and Culture

礒村　克郎　ISOMURA Katsuro

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

西田　かほる　NISHIDA Kaoru

文化政策学部　国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

永井　聡子　NAGAI Satoko

文化政策学部　芸術文化学科
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

百束　朋浩　HYAKUSOKU Tomohiro

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

中野　民雄　NAKANO Tamio

デザイン学部　デザイン学科（アドバイザー）
Department of Design, Faculty of Design（advisor）

本研究は、両学部・両研究科の連携的な活動が想定される講堂、ギャラリー、自由創造工房、文化・芸術研究センター、図書館・情報センターなどにおける研究・教育環境の調査に基づき、改善案の具体化を行なったものである。研究成果は、図面化し3DCGデータを制作した。これらのデータを基にして、修正や展開が容易に行えるので、持続的な研究・デザインが可能になる。

This research project embodied improvement proposals based on an investigation of the research and educational environment in Auditorium, Gallery, Public Studio, Art and Culture Research Center, Library and Information Center, and other areas where collaborative activities between the two faculties and graduate schools are anticipated. The results of the research were converted into drawings and 3D CG data was produced.

015

2025年本学の「マイフェイバリットショップ」から学ぶZ世代の志向について（5）
―変わりゆく日本の美意識の探求へ―

2025 The Orientation of Generation Z Learning from "My Favorite Shop" in Shizuoka University of Art and Culture (5)
-Toward an exploration of Japan's changing aesthetic sense-

植田　道則　UEDA Michinori

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

2021年より始まった“マイフェイバリットショップレポート”（自分のお気に入りの商業施設を取り上げ、受講者同士の双方向の意見交換により自分たちの生活スタイルの一端を考察する取組、以降MFSと略記）は、本学学生達が、日常生活の一部となっている商業施設に対して、社会潮流の中でどのような志向や行動を伴うものかを知ろうとする試みである。

多くの識者が既に指摘しているように、今日の日本人の美意識はこれまでのものとは変化してきていると言われる。2019年に国交省が行った国民意識調査においても日本人の美意識が時代の社会的な背景により変化してきていることを報告している。

MFSが主題とする「変わりゆく日本の美意識の探求」も、これらの見立ての延長線にあるもので、過去のMFSでは、特に、《個の志向》、《環境志向》、《慎ましき贅沢志向》が、継続して強い傾向を示すことが明らかになった。

本年2025年は、昨年に続き、志向を分析するキーワードとして、基盤となる日本の美意識のキーワードを設定するとともに、調査対象を「カフェ等の喫茶空間」に限定、調査シートに、自由記述欄を設け、自由記述文面の解読を元に考察を進めている。

The “My Favorite Shop Report” (MFS), launched in 2021, is an initiative where students examine aspects of their own lifestyles by featuring their favorite commercial facilities and engaging in interactive discussions with fellow participants. It represents an attempt by our university students to understand the attitudes and behaviors associated with commercial facilities that have become part of their daily lives within the context of broader social trends. As many experts[1] have already pointed out, it is said that the aesthetic sensibilities of Japanese people today are changing from what they were in the past. The Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism’s 2019 National Public Opinion Survey[2] also reported that Japanese aesthetic sensibilities are changing due to the social background of the times. The MFS’s theme, “Exploring Japan’s Changing Aesthetic Sense,” extends from these observations. Past MFS surveys revealed consistently strong trends, particularly in the areas of Individual Orientation, Environmental Orientation, and Modest Luxury Orientation. This year, 2025, following last year, we have set foundational keywords representing Japan’s aesthetic sensibilities as key terms for analyzing these orientations. We have also limited the survey subjects to “coffee shops and other tea-drinking spaces,” added a free-response section to the survey sheet, and are advancing our analysis based on the interpretation of the responses provided in this free-response section.

016

地域高齢者の国際交流への意識と遠隔ツールの可能性に関する調査報告
―南伊豆町および湖西市における調査より―

A Survey Report on Older Adults' Awareness of International Exchange and the Potential of Remote Tools: Based on a Minamiizu-Kosai Survey.

高山　靖子　TAKAYAMA Yasuko

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

迫　秀樹　SAKO Hideki

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

松江　幸子　MATSUE Sachiko

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

サリッチ・エドワード・ピアース　Edward Pearse SARICH

文化政策学部 国際文化学科
Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は、高齢者の国際交流への意識と遠隔ツールの可能性を、ウェルビーイング向上と社会参加促進の観点から多角的に調査したものである。

南伊豆町および湖西市の調査から、国際交流への関心は特定の趣味や地域に限定されず、活動的な高齢者層に広く潜在しており、生きがい意識の高さと相関することが確認された。また、国際交流への参加促進には、語学能力ではなく、料理や手工芸といった身近な関心事をテーマとするコンテンツ設計が最も効果的であることや、交流イベントの行動観察から、遠隔ツールを用いたオンライン交流形式は高齢者にも十分に受容可能であることが示された。ただし、高齢者の参加を促進し、移動や経済的障壁を解消する遠隔交流の成功は、PC設定や質問対応を担う人的サポートが会場に適切に配置されることに依存する。高齢者の積極的な参加を促すためには、関心に合わせたイベント設計と現場での適切な支援体制が、ウェルビーイング向上に資する社会参加を促進する鍵となるであろう。

This study investigated the awareness of international exchange among older adults and the potential of remote tools, with the aim of promoting social participation and enhancing well-being.

Through comprehensive surveys conducted in Minamiizu Town and Kosai City, it was confirmed that interest in international exchange is not limited to specific hobbies or regions but is broadly latent among active older adults and shows a correlation with high levels of ikigai (sense of purpose in life). For promoting participation, content design centered on familiar topics such as cooking and handicrafts is most effective, as it minimizes the psychological barrier for older adults regardless of their language proficiency. Furthermore, observational data confirmed that online exchange formats utilizing remote tools are sufficiently acceptable to this population. However, the success of remote exchange—which effectively removes mobility and financial barriers—heavily depends on the provision of appropriate on-site human support for technical operations and question handling. It is concluded that designing events around interests and ensuring adequate on-site assistance are key to facilitating social participation that contributes to the enhancement of well-being.

017

三遠南信の文化財建造物の特徴

Characteristics of Cultural Property Buildings in San-En-Nanshin

新妻　淳子　NIITSUMA Junko

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

本稿は、三遠南信（東三河、遠江、南信濃）の古くからのつながりが創り上げてきた文化の特徴を、文化財建造物を中心に据えて探るものである。これまで民家、寺社、近代化遺産、近代和風建築などの全国的な調査が都道府県単位で行われてきたが、県境をまたいだ地域の繋がりが見えにくく、建築や産業遺産が点として扱われることが多かったといえる。今回、三遠南信に所在する国県市町村指定及び国登録の文化財をリスト化し、関連調査の中で得た建造物等の情報も加えた。道（陸の道、川と海の道、鉄道）、建築（民家、農村舞台、寺院建築、神社建築、建築彫刻）をキーワードに三遠南信の文化財建造物等を紹介しつつ、建築文化の特徴を示してみたい。

This paper explores the cultural characteristics created by the ancient connections between San-En-Nanshin (East-Mikawa, Totoumi, and South-Shinano), focusing on cultural property buildings. Until now, nationwide surveys of folk houses, temples and shrines, modernization heritage, and modern Japanese-style architecture have been conducted at the prefectural level, but it is difficult to see the connections between regions across prefectural borders, and architectural and industrial heritage has often been treated as points. This time, we have compiled a list of cultural properties designated by national prefectures, municipalities, and nationally registered cultural properties located in San-En-Nanshin, and added information on buildings and other items obtained during related surveys. I would like to show the characteristics of architectural culture while introducing the cultural properties and buildings of San-En-Nanshin with the keywords of roads (land roads, river and sea roads, railways), and architecture (folk houses, rural stages, temple, shrine, architectural sculptures).

018

半屋外公共空間における 仮設物のデザインに関する研究 ―浜松市中心市街地を対象として― その1

Research on the design of temporary elements in semi-open public spaces — On the site of Central area of Hamamatsu city — Part 1

丹羽　哲矢　NIWA Tetsuya

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

亀井　暁子　KAMEI Akiko

デザイン学部　デザイン学科
Department of Design, Faculty of Design

本論文は浜松市中心市街地の遠州鉄道高架下の半屋外公共空間である新川モールを対象とした利用形態調査及び、それを踏まえた仮設物デザインの実践的研究である。対象敷地の調査により、時間帯及び曜日及び日常時あるいはイベント時と異なる状況により多様な形態で利用されていることがわかった。これに加え、全国の類似事例の調査分析を通じ、対象敷地の特徴を「線形形状」「中央部の高架下と道路側部の天候環境による違い」「開放感のある土木スケールの高架下空間」と捉えた。これらの特徴を踏まえ、デザインは「複数の顔を持つ1つの家具」をコンセプトとし、3系統・計8つの基本案を提案し、その中から3つの家具・計8パーツを制作することとした。制作過程においては地域企業の協力のもと木工CNCルーターを利用したが、その加工機械の特性にあわせた部材構成へとデザインを昇華した。設置した仮設物はその後も多様な使い方をされながら、人々の居場所を提供している。

This paper is a practical study of temporary elements design based on a survey of usage patterns at Shinkawa Mall, a semi-open public space under the Enshu Railway viaduct in the center of Hamamatsu City. The survey of the site revealed that it is used in a variety of ways depending on the time of day, day of the week, and circumstances that vary from normal to event time. In addition, through research and analysis of similar cases across the country, the characteristics of the target site were identified as "linear shape," "differences in weather conditions between the area under the viaduct in the center line and on both sides," and "open-feeling civil engineering-scale underpass space." Based on these characteristics, the design concept was "one piece of furniture with multiple faces," and eight basic plans in three series were proposed, from which three pieces of furniture in eight parts were produced. In the production process, a woodworking CNC router was used with the cooperation of a local company, and the design was refined to suit the characteristics of the processing machine. The temporary elements that was installed continues to provide a place for people to live in, with various uses.



■発行：静岡文化芸術大学　■編集：研究・連携推進室 〒430-8533 静岡県浜松市中央区中央2-1-1
TEL.053-457-6105　FAX.053-457-6123
下記メールアドレスへ本冊子に対するご意見をお待ちしております。
E-mail　kenkyu@suac.ac.jp　URL　https://www.suac.ac.jp/
2026.10